

保育者養成におけるグループレッスン指導のための ピアノ弾き歌い教材開発

— 授業実践結果から見る開発教材の有効性 —

Development of teaching materials for the acquisition of piano performance skills
in the nursery teacher training course

— Effectiveness of development teaching materials viewed from class practice results —

次世代教育学部こども発達学科

高崎 展好

TAKASAKI, Nobuyoshi

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

Abstract : For the past three years, I have been conducting research and development on teaching materials necessary to acquire piano playing skills necessary for nursery teacher training. This teaching material is the development of a learning material aiming to acquire the piano skills while enjoying the basic skills of the piano, the reading skills, and the performance skills efficiently in a little time, even for those who have no piano playing experience. The purpose of this research is to establish a teaching material development and teaching method for singing brightly, cheerfully and expressively while playing the piano. It clarifies the effectiveness of the developed teaching materials.

キーワード : 保育士, 教員養成, ピアノ, 教材, 共同学習

Keywords : Childminder, Teacher Education, Piano, Teaching materials, Collaborative learning

はじめに

保育士養成課程におけるピアノ弾き歌い指導について、ピアノ経験者、未経験者への指導は、個人の技術レベルに合わせた個別指導が最善の方法であると確信していた。

しかし、保育士養成校における授業90分間に個人指導となると、学生ひとりにつき、15分の指導を考えると、教員一人につき、6～7人の指導が限界となり、指導者の増員が必要となる。

個人指導において、ピアノ経験者は、幼少時より習得した音楽基礎力、読譜力、ピアノ演奏テクニックを有しており、授業課題を難なくこなし、進度の早い者は、高度なテクニックを要する楽曲へと課題を進める。

しかし、ピアノ未経験者に対する限られた個人指導の時間では、音楽基礎力、読譜力、テクニックの習得

は非常に困難であり、弾き歌い課題曲、ピアノ教則本によるピアノ基礎力及び応用力の習得に要する時間は膨大となる。

ピアノ未経験者の大半は、読譜力が習得できていないため、初めて目にするタイトルの楽譜は「これはどのような曲ですか?」と読譜をすることもなく、Webより、YouTube動画等に頼った独習となっている。中には、ピアノができない理由から、保育士資格、幼稚園教諭免許取得を諦めてしまう学生も少なくない。

そこで、ピアノ未経験者が過半数を占める状況において、共同学習を取り入れたピアノ指導が有効である研究結果が数多く報告されている。坂本(2013)は、共同学習を取り入れたピアノ実技指導の学習効果について、相互に聴き合いをする活動は、情意面を喚起する効果が高い。学習者相互に聴き合うことで意欲が高まり、自律的な学習が促進された。学習者相互に批評

することで、演奏技能向上に役立つ情報が交換された。他の学習者の努力が見えることで学習意欲が持続され、共同学習が有効であり、演奏技能の向上に結びついたと述べている。共同学習における、音楽基礎力、読譜力、ピアノ演奏テクニックを限られた時間の中で習得するための指導法の確立及び、経験者、未経験者に関わらず、音楽基礎力、読譜力、応用力の習得できるピアノ弾き歌い教材が必要であると筆者は教材開発の着手に至った。

ピアノ弾き歌い教材開発については、主にコードネームを使用した単旋律一段楽譜を教材として作成を行う。

保育、教育現場における歌唱指導のためのピアノ伴奏法は大きく分けて二通りある。一つ目は、原曲の伴奏法。これは、楽曲そのもののイメージや曲想、作曲者の伝えたいメッセージがあるため、子どもたちに予め曲を聴かせる場合や、仕上げをする段階では、この伴奏法に勝るものはない。二つ目は、簡易伴奏である。畠澤(2015)は、子どもたちがメロディーを覚える際には、メロディーをわかりやすく伝えるために、簡潔な伴奏を用い、子どもたちの独自の自由な発想を引き出すこともあるだろうと述べている。

昨今、ピアノ弾き歌いについては、左手の伴奏をコード奏することで、初心者でも弾き歌いができるようになる研究報告が多くなされている。平井(2016)は、コードネームによる簡易伴奏によるピアノ弾き歌いは、学生自身も余裕をもって演奏することが可能であるため、教育現場においても、子どもたちの観察や評価をしながらの演奏が可能であると述べている。また、井口(2018)は、即興的なコードネームによる簡易伴奏をした方が、幼児の動きなどのその時々状況に応じることができるため、役立つことが多いと述べている。

保育教育現場における歌唱指導のためのピアノ弾き歌いは、高度な演奏テクニックを要する伴奏楽譜を使用するよりも、コード楽譜を使用した簡易伴奏で、表現豊かに大きな声で伸びやかに、かつ旋律の正しいリズム、音程、歌詞を楽譜から読み取り表現することが歌唱指導には必要である。

限られた学習時間の中でピアノ未経験者でもピアノ弾き歌いに必要な読譜力及び簡易伴奏法を習得するための保育士、教員養成に適した教材開発が必要であると筆者は本研究に至った。

I. 目的

本研究は、保育士、幼稚園教諭を目指す学生が採用試験において、ピアノで旋律、伴奏を演奏し、明るく元気かつ、豊かな声量で表現豊かに歌唱できるようにするための教材開発及び共同学習の指導法の確立を目的とする。

ピアノ未経験者が過半数を占めるグループレッスンにおいて、楽譜を読むことが苦手な学生やピアノに多大なる抵抗感を抱く学生、また、音楽経験、ピアノ経験の有無に関わらず、学習意欲の湧く、教材の開発を目的とし、保育・教育実習及び、採用試験に求められるピアノ弾き歌いテクニック、表現力、読譜力とその応用力定着に向けた効率的かつ効果的な指導内容と指導法の確立が望まれる。また、その指導に基づいた音楽理論と読譜スキルの定着がピアノ学習に及ぼす影響と効果を検証し、その有効性を明らかにする。

保育、教育現場において、演奏者自身が音楽を楽しむことができなければ、子どもたちに音楽の楽しさ、喜び、素晴らしさを伝えることは困難である。ピアノに対する嫌悪感、苦手意識の軽減を図り、一人でも多くの学生が音楽を楽しみ、表現することの素晴らしさを体感できることを教材開発研究の軸としたい。

II. 方法

期 間：2019年4月4日～7月18日

時 間：週1コマ×15回(各90分)

場 所：K大学 芸術センター音楽室

設 備：グランドピアノ、電子ピアノ27台

五線付きホワイトボード、プロジェクター

対 象：保育士資格取得希望1年生76名

科 目：器楽演習I(共同学習18～22名クラス)

クラス：経験、未経験学生を事前調査により均等に分布
ピアノ経験者、未経験者数が均等になるよう
1クラス18～22名の共同学習としてのグループ
レッスン(図1)。本学ではMLシステム¹⁾は
未導入。電子ピアノは学生ひとりに付き1台。
教 材：ハ長調を中心としたコードネーム記載の旋律
楽譜を教材として作成及び冊子²⁾として配布。

調査方法

授業15回終了後に手順2～8の質問紙調査からデータ収集、分析を行い、使用教材が有効かつ効果的であるか検証を行う。

手順1：ピアノ経験に関する事前実態調査

- 手順2：音楽理論と読譜スキルの理解度に関する調査
- 手順3：音楽理論科目定期試験結果にみる問題正答率
音楽理論科目と連携することでソルフェージュ、発声、歌唱指導の効率化を図った。
- 手順4：予習復習時間に関する調査
- 手順5：コード楽譜における演奏に関する調査
- 手順6：模擬保育（共同学習）に関する調査
- 手順7：学習内容に関する調査
- 手順8：授業15回を終えたピアノ学習に関する調査
- 手順9：個人レッスンからグループレッスンの変遷と単位取得率推移



グループレッスン風景（図1）

Ⅲ. 質問紙調査内容と結果

1. ピアノ学習経験に関する事前調査：有効回答数76

ピアノ学習経験の有無について、未経験と回答したのは67.1%と過半数以上の学生が未経験者である。

経験ありと回答した学生32.8%の経験年数の分布は1年未満8%，1～2年12%，3～5年8%，6～7年24%，8～9年12%，10年以上36%，全体の26.3%の学生が5年以上のピアノ学習経験を有しており、個人差はあるが、ピアノ学習については5～6年以上の学習経験があれば、基本的な読譜力の素養はありと考えることができ、ピアノ学習に苦勞することはないと考えられる。

これらの学生にとって、本研究教材は容易に感じられることも想定されるが、ピアノ経験者においても、弾き歌いテクニックは、これまでのピアノ学習とは違った練習が必要になるため未経験者と同様の質問紙調査を実施する。

ピアノ（鍵盤楽器）の所持率については、51.3%と半数の家庭または、下宿先にピアノを練習できる環境がある。ピアノ学習を行う上で鍵盤楽器は必需品であり、保育者を目指す学生にとっては恵まれた環境である。

読譜力に関する調査では、拍子、リズム、階名等の

素養があると回答したのは56.6%であり、ピアノ未経験者の割合から考えると、これまでの学校生活において、吹奏楽部等の音楽系部活動、地域の合唱団に所属していた等の理由により、楽譜に馴染みのある学生が半数以上であることが分かった。

保育士資格、幼稚園教諭免許を取得するにあたり、ピアノ学習への不安があると回答したのは43.4%、ピアノ未経験者の割合と比較すると、ピアノ学習への不安よりも期待度が高いことが推測される。

その他、自由記述回答に、習っていたけど不安、楽譜が読めるようになるか心配、手が小さいのでオクターブが届かない、楽譜は読めるがピアノは弾いたことがありません、楽譜を読むことが苦手、ヘ音記号を読むのが苦手、読譜にとっても時間を要する、両手で演奏できるようになるのか、ピアノ経験が全くなく不安、どんな練習をしたら弾けるようになるか、これまでピアノを習ってきたが両手で弾くことができない、弾けるように頑張りたい等、指導上配慮を要する内容も見受けられる。

2. 音楽理論と読譜スキルの理解度に関する調査：有効回答数70（複数回答可）

音楽理論科目と連携を図り、ピアノ学習に必要な読譜スキルの学習時間に設けたため学習の効率化が図れた。

ピアノ学習時間に課題曲の読譜に必要な音楽記号、音楽用語、リズム学習ができるよう楽典ワークシート（図4）を実施し、読譜スキルの定着化を図った結果は表1の通り。

音楽理論と読譜スキルの理解度に関する調査結果（表1）

選択肢（複数回答可）	回答 %
リズムの読み方を理解すれば楽譜が読めることがわかった	70
リズムを声に出して手で叩けるようになった	41.1
リズムが正しく読めるようになった	38.6
リズムを声に出して読むようになった	35.7
楽譜があると率先してリズムを読むようになった	30
リズムが読める = 叩けるということがわかった	30
リズムを読むことが楽しいと思うようになった	25.7
これまで読めずに諦めていたリズムが読めるようになった	25.7
リズムを読むのは難しいと感じる	14.3
声に出して読めるが、手で叩くとずれてしまう	8.6
リズムの読み方の定義を忘れて読めなくなることがある	8.64
リズムの読み方の定義をまだ理解できていない	1.4

3. 音楽理論科目定期試験結果からみる問題正答率

音楽理論科目16回目に実施した定期試験結果から音楽理論に関する各設問の正答率を表2にまとめた。

楽典ワークシートで毎時間学習していた、内容については高い正答率であり、設問10に関しては正答率100%であり、コードネームについて理解できた。

音楽理論科目の定期試験結果正答率（表2）

試験問題出題項目	正答率 (%)
設問1 音符・休符	98
設問2 リズム読み方	98
設問3 音部記号	78
設問4 五線、音楽記号	94
設問5 音名（日本、ドイツ）	74
設問6 音符の計算	80
設問7 反復記号	94
設問8 音程	79
設問9 音階	80
設問10 和音（コード）	100

4. 予習復習時間に関する調査：有効回答数70

自宅または学内施設における1週間のピアノ予習、復習時間について回答数が多かったものは、週1日、30～60分の練習時間を確保していると回答。

週2日22.9%、週3～4日24.3%、週5～6日2.9%、毎日練習している7.1%、全く練習をしない11.4%であった。

ピアノ未経験者数が過半数を超える現状、理想の予習、復習時間は1週間に最低でも90分以上（30分×3日）を望むところだが、週1日30分程度の練習では、読譜力及びピアノテクニックの定着は厳しいと考えられる。高崎（2018）は、ピアノ予習復習時間の研究調査結果から、学内ピアノ独習室を利用しない学生の理由に、授業の空き時間がない10.9%、部活動やアルバイトで利用する時間がない17.1%、練習しなくてもバイエル程度の楽譜は演奏ができる6.2%、その他1.5%、35.7%が学内施設を利用しないと回答している。自宅または下宿先にピアノがあり利用している39%、独習室以外の学内のピアノのある場所を利用25%、64%の学生は、予習、復習をしていることが窺える。

5. コード楽譜における演奏に関する調査

「コード（C、F、G7）を使用した楽譜を見て演奏ができますか」について表3の回答結果が得られた。

コード楽譜における演奏に関する調査結果（表3）

選択項目	回答 (%)
できる	78.9
できるが間違える	17.1
できているかわからない	3.9
できない	0

コード譜を見て、ピアノ弾き歌いができる、できるが間違えると回答したのは96%の学生が15回の授業を経て、コード楽譜で演奏できると回答している。

できないと回答したのは0%と学習者全員がコード楽譜を見てピアノを弾くことが可能であるということがわかる。

6. 模擬保育（共同学習）に関する調査：有効回答数70

毎時間、課題曲をピアノ演奏する学生を先生役、ピアノ演奏に合わせて歌う学生を子ども役として模擬保育を実施する。

模擬保育を行うことで坂本（2013）の共同学習の効果が期待できる。相互にピアノ演奏を聴き合ったり、他の学習者の努力が見えたり、演奏後に拍手などで褒め称えあったりすることは、学習意欲の持続と向上が期待される。何よりピアノは人前で演奏することに慣れなければ、実際の保育教育現場で子どもたちの前でピアノを演奏することは困難である。

模擬保育は、誰もが最初は極度の緊張感を味わうが、模擬保育を通して、それらの抵抗感の軽減を図る。

調査結果（表4）から、人前での演奏は難しいと回答した学生が多く見られる一方、共同学習による効果が現れている回答も見受けられる。

模擬保育（共同学習）に関する調査結果（表4）

選択項目（複数回答可）	回答 (%)
人前で演奏するのは難しい	55.7
緊張して練習のときのように演奏できない	47.1
自身の演奏でみんなが歌ってくれることが嬉しい	32.9
保育者を目指す者としてとても良い刺激と勉強になる	32.9
楽しいと感じる	27.1

7. 学習内容に関する調査：有効回答数70（複数回答可）

ピアノ学習について、学習目標、学習計画、学習量、授業内容構成、教材精度に関する質問項目につい

て「そう思う」と回答が得られた結果を表5にまとめた。

学習目標、授業内容構成、教材の精度については高い回答率だが、学習計画、学習量について、授業回数前半に発声や音楽理論の学習に時間を大幅に費やしたため、授業回数後半の計画、学習量に遅れが出たことが原因と考えられる。

学習内容に関する調査結果（表5）

質問項目（複数回答可）	回答（%）
学習目標が明確に設定されていた	82.8
ピアノ弾き歌いを習得できるよう計画されていた	78.5
学習量は適切だった	71.4
授業に参加し、全員が発表できる構成になっていた	82.8
教材は学びやすいものであった	90

8. 授業15回を終えたピアノ学習に関する調査：有効回答数70

ピアノ学習について、88.8%の学生が前向きな回答をしていることがわかる。ピアノ経験に関する事前調査結果から、ピアノ学習への不安があると回答した学生は、43.4%であったが、不安は取り除けた結果であると考えられることができる。

授業15回を終えた意見に関する調査結果（表6）

質問項目	回答（%）
できるようになったら楽しいと感じた	41.7
ピアノは正しく練習を行えばできることがわかった	31.4
予想していたよりも簡単だった	15.7
予想以上に難しいものだった	5.7

自由記述には、未経験者でもわかりやすい指導のためピアノが弾けるようになった、自主学習の大切さを学んだ、ピアノを弾く楽しさが学べた、ピアノ弾き歌いは初めての事で難しいと感じたが段階を踏んで練習することで出来るようになった、正しい練習方法を習得することでできるようになることがわかった、ピアノを弾きながら歌うことは、とても難しいし、人前だと更に緊張しましたが皆の前で弾き歌いをする事で将来の自分の姿が少し見えたような気がして良かった、とても楽しく勉強できた等、教材の有効性、共同学習の効果が感じられる回答が得られた。

9. 個人レッスンとグループレッソンの比較

個人の実技レベルに合わせたマンツーマンの個人レッスンを主とした指導は、学生一人ひとりを丁寧に

指導するという観点から非常に有効な手段であるが、学生数に合わせたピアノ指導教員が必要となる。

しかし、限られたピアノ指導教員で個人レッスンを主とした授業を実施する場合は、90分授業にひとり15分の個人指導を実施する場合、6～7人の指導が限界となる。これまで、本学でも個人指導を主とした、教員1人につき8人のマンツーマン指導を行ってきた。

ピアノ経験者が多い場合は、10～15分の指導においても学習効果が得られるが、未経験者が多い場合は、楽譜の読み方、指使い、練習方法等、指導内容が多いため、1週間に15分程度の個人指導ではピアノ学習は困難である。また、レッスン以外の待ち時間は、電子ピアノでヘッドフォンを使用した練習時間となる。予習、復習を行っている学生には有効な時間ではあるが、ピアノ未経験者で基本的な読譜力が身に付いていない学生にとっては、有効な時間とはならない。

昨今、ピアノ未経験者が過半数を占める現状において、個人指導を主とした15回の授業では、保育士養成に必要なピアノ基礎技術、弾き歌い技術の習得は非常に困難である。

未経験者の個人指導において、保育実習、幼稚園教育実習、また保育士、教員採用試験に必要なピアノ演奏レベルに到達させるために課する演奏技術を器楽演習Ⅰ、Ⅱ（ピアノ演習科目）の単位認定条件とする場合、単位取得率が著しく低下する。単位不認定が原因で保育士資格、幼稚園教諭免許取得を諦めてしまう学生も少なくない。

本学の保育実習および幼稚園教育実習の参加内規に器楽演習Ⅰ及びⅡの単位を修得済みでなければ、実習に参加できないことが明文化されている。

ピアノ未経験者の多くは、読譜に躓き、楽譜が読めないために、練習が捗らない状況にあるため、これまでのピアノ個人指導の概念を覆し、ピアノを練習するための読譜力を育成する共同学習が有効であり、効果があることが本研究から明らかとなった。

これらを鑑み、保育士養成には共同学習を取り入れたグループレッソンが有効であり、効果的であることが、個人レッスンからグループレッソンの変遷と単位取得率推移（表7）からも明らかである。

個人レッスンからグループレッソンの変遷と単位取得率推移（表7）

授業形態	年度	科目	開講	履修者数	単位取得率
個人 レッスン	2015	器楽演習Ⅰ	前期	76名	77.6%
		器楽演習Ⅱ	後期	62名	48.3%
	2016	器楽演習Ⅰ	前期	70名	74.2%
		器楽演習Ⅱ	後期	53名	52.8%
グループ レッスン 模擬保育	2017	器楽演習Ⅰ	前期	67名	91%
		器楽演習Ⅱ	後期	64名	93.7%
	2018	器楽演習Ⅰ	前期	57名	98.2%
		器楽演習Ⅱ	後期	59名	93.2%
	2019	器楽演習Ⅰ	前期	76名	100%
		器楽演習Ⅱ	後期	76名	96%

個人レッスンを実施していた2016年度までは、教材に標準バイエルピアノ教則本³⁾、こどものうた100⁴⁾を使用。

個人レッスンにおける課題内容は以下の通り。

器楽演習Ⅰ 課題内容については、バイエル教則本No.8, 10, 15, 18, 21, 31, 45, 46, 55, 104, 試験課題曲No.59, 60, 65, 66, 72, 計15曲、こどものうた100については、ちょうちょう、チューリップ、こおろぎ、ぶんぶんぶん、あめふりくまのこ、たなばたさま、かたつむり、おつかいありさん、あくしゅでこんにちは、みずあそび、試験課題曲については、お花がわらった、山の音楽家、まつぼっくり、とんぼのめがね、ゆき、計15曲、合計30曲の課題曲を課していた。

ピアノ実技試験については第8回目に中間試験として、課題曲より各1曲選択、第16回目に期末試験として、課題曲より各1曲を抽選で演奏する。

器楽演習Ⅱ 課題内容については、バイエルピアノ教則本No.77, 80, 81, 85, 88, 92, 93, 94, 97, 104, 試験課題曲No.78, 91, 98, 100, 102, こどものうた100については、めだかのがっこう、ぞうさん、ふしぎなポケット、てをたたきましょう、やぎさんゆうびん、おかえりのうた、かわいいかくれんぼ、とんでったバナナ、はたけのポルカ、いぬのおまわりさん、試験課題曲については、思い出のアルバム、あわてんぼうのサンタクロース、さんぽ、いちねんせいになったら、計15曲。合計30曲の課題曲を課していた。

ピアノ未経験者がこれらの課題を習得するためには、15分の個人指導では、予習復習の負担が大きく、ピアノ学習への意欲と時間が必要である。

Ⅳ. 開発教材の概要

環太平洋大学学内特別研究により高崎（2017）は、保育士養成のためのピアノ弾き歌い教材開発研究に着手。

本教材は、限られた時間の中で、保育者として必要なピアノ基礎力、読譜力、視唱力、演奏テクニック、ピアノ弾き歌い技術を効率よく習得するための器楽演習Ⅰ、Ⅱ、授業配布テキストとして2018年3月、第1刷発行。ピアノ学習に不安や抵抗感を抱く学生、音楽経験、ピアノ経験の有無に関わりなく、ピアノ学習が楽しく、意欲的に行える教材開発を目指した。

本書掲載の楽曲は全て楽譜作成ソフトFinaleを使用し、選曲には、保育園、幼稚園実習等で活用できる子どもの歌を中心とした、見やすい楽譜サイズで制作。楽譜については、標準バイエルピアノ教則本を基準として、五線を120%～180%拡大して制作することで読譜によるストレスの軽減を図る。

主にハ長調、ヘ長調、ト長調の主要三和音を転回形でスムーズな伴奏が可能、コード伴奏表を付録しているため、調性が変わっても同じ転回和音のコードを使用するため、コード伴奏の習得がスムーズ。

器楽演習Ⅰ（15回）において課題曲20曲、器楽演習Ⅱ（15回）において課題曲30曲を到達目標に設定するため1年間で保育実習、幼稚園教育実習での活用が可能となる。

各課題曲に楽譜に記された、音楽記号、リズム、音楽用語、コードが学習、理解できる楽典ワークシートを掲載。コード伴奏の徹底と楽典ワークシート学習の繰り返し学習で読譜力の習得を目標としている。

ピアノ弾き歌いレパリー・スタンプ評価シートを活用することで、学習進捗状況、評価及び点数が一目でわかり、模擬保育発表を行うことで共同学習の効果が期待される。

Ⅴ. 教材内容

1. 表紙デザイン

保育士、幼稚園教諭を目指す学生が馴染みやすい表紙デザインを採用。



教材表紙デザイン (図2)

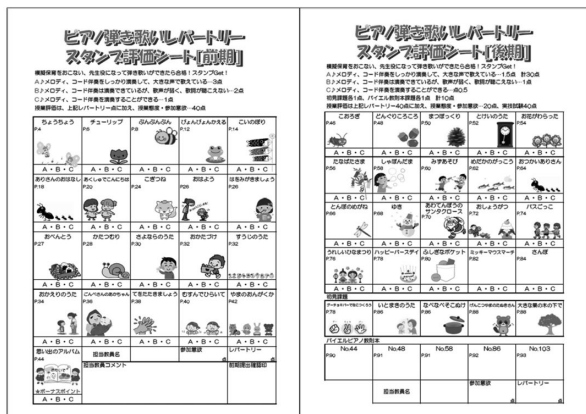
2. ピアノ弾き歌いレパートリー・スタンプ評価シート

掲載曲全曲をスタンプシートとして模擬保育を行い、先生役になって弾き歌いができれば合格スタンプ押印。また、演奏レベルに応じてABC 3段階評価に押印。

演奏レベルに応じたABC 3段階評価 (表8)

評価	評価内容	点数
A	メロディ、コード伴奏をしっかりと演奏でき、大きな声で歌うことができる	3点
B	メロディ、コード伴奏はできているが、歌声が弱く、歌詞が聴こえない	2点
C	メロディ、コード伴奏を演奏することができる	1点

レパートリー・スタンプ評価シートは、課題曲を順次進め熟していくことで、読譜スキル、演奏テクニック、コード(和音記号)が習得できる教則本形式となっている。スタンプ評価シートを活用することで学生の学習進度、習熟度、評価が自身で確認できるため学生のモチベーションの向上を意図した。



ピアノ弾き歌いレパートリー・スタンプ評価シート (図3)

3. コード伴奏楽譜と楽典ワークシート

教材の楽譜を制作するにあたり、経験者、未経験者に関わらず、読譜しやすいと感じる楽譜サイズのアンケート調査を実施。アンケート調査からは92.4%が拡大された大きいサイズが読譜にストレスを感じないと回答。標準バイエルピアノ教則本を基準として、五線を180%拡大して制作。



コード伴奏楽譜と楽典ワークシート (図4)

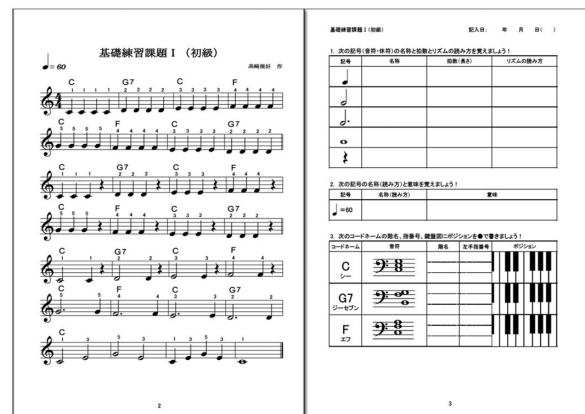
掲載全曲にピアノ基礎テクニックを習得できるよう指使いを完全網羅。無理なく、正しい手の形で演奏できるよう指使いは特に配慮して指導を行う。

また、読譜スキル向上のための楽典ワークシートを全曲に付録。模擬保育、保育実習、教育実習を想定した、ピアノで演奏する手遊び、歌遊びワークシートを作成。

ピアノ学習と併せて実際の保育実習を想定したピアノ学習内容となっている。

4. 基礎練習教材

コード伴奏の応用として、分散和音の伴奏にも適応できるようコード譜以外に基礎練習課題として、初級、中級、上級とレベル別に課題を作成。(図5)



ピアノ基礎練習教材 (図5)

コード伴奏のほかに左手コード伴奏に分散和音等の応用ができるよう、両手をバランスよく練習するための課題として、バイエルピアノ教則本よりNo.44, 48, 58, 86, 103を選曲、コード伴奏も可能な楽譜として編集している(図6)。



バイエルNo.44, 103 (図6)

5. コード (指使い, ポジション) 一覧表

コードについては、転回形和音を使用しているため、課題曲によって調性が異なった場合も、同様のコード伴奏を使用することでコード楽譜によるコード伴奏の定着化を図る。

本書で使用する18種類のコード一覧表を付録(図7)。

コード ネーム	楽譜 (音符)	階名	左指 番号	鍵盤 ポジション	コード ネーム	楽譜 (音符)	階名	左指 番号	鍵盤 ポジション
C		ソ	1		Cm		ミ	3	
D		ラ	1		Dm		ファ	2	
E		ソ#	1		Em		ミ	2	
F		ラ	1		Fm		ファ	2	
G		ソ	1		Gm		ソ	2	
A		ラ	1		Am		ミ	3	
B ^b		シ	1		B ^b m		ファ	2	
G7		ソ	1		C7		シ	1	
F7		ラ	1		G ^{dim}		ソ#	2	

コード伴奏パターン

■2拍子の場合 四分音符を一拍ずつ弾きましょう。

■4拍子の場合 四分音符を一拍ずつ弾きましょう。

コード一覧表 (図7)

楽典				楽典			
音符・休符の形				音符・休符の形			
音符・休符の形	名称	読み方の定義	長さ	音符・休符の形	名称	読み方の定義	長さ
	全音符	ター 2 3 4	4拍		8分音符	タタ	
	付点2分音符	ター 2 3	3拍		16分音符	タカカ	
	2分音符	ター 2	2拍		8分音符	タータカ	
	付点4分音符	タン 1.5	1.5拍		16分音符	ターター	
	4分音符	タン	1拍		シンクベーション	ターター	
	8分音符	タ	0.5拍		付点のリズム	ターツカ	
	4分音符	クン	1拍		クン	クンクン	
	8分音符	ウ	0.5拍		3連符	ティタタ	
	8分音符	ウ	0.5拍		シンクベーション	タタタ	

楽典				楽典					
強さを表わす記号				強さを表わす記号					
記号	名称(読み方)	意味	記号	名称(読み方)	意味	記号	名称(読み方)	意味	
	p	ピアノ	弱く		スラー	高さの異なる音程に付けられた連続した音程を一つの音程として演奏する		トリル	同じ高さの音程を繰り返す
	mp	メゾフォルテ	やや強く		スタッカート	その音を短く切って演奏する(その音程の半分の長さ)		トリル	同じ高さの音程を繰り返す
	mf	メゾフォルテ	やや強く		トリル	同じ高さの音程を繰り返す		トリル	同じ高さの音程を繰り返す
	f	フォルテ	強く		トリル	同じ高さの音程を繰り返す		トリル	同じ高さの音程を繰り返す
	ff	フォルティッシモ	とても強く		トリル	同じ高さの音程を繰り返す		トリル	同じ高さの音程を繰り返す
	sf	スフォルツァンド	特に強く		トリル	同じ高さの音程を繰り返す		トリル	同じ高さの音程を繰り返す
	クレッシェンド	だんだん強く			トリル	同じ高さの音程を繰り返す		トリル	同じ高さの音程を繰り返す
	クレッシェンド	だんだん弱く			トリル	同じ高さの音程を繰り返す		トリル	同じ高さの音程を繰り返す
速度を表わす用語・記号				速度を表わす用語・記号					
	アダージョ	ゆるやかに			アタセト	その音を強調して			
	アンダンテ	ゆるやかに			アタセト	その音を強調して			
	アンダンティーノ	アンダンテより速く			アタセト	その音を強調して			
	モダート	中程度の速さで			アタセト	その音を強調して			
	アレグレット	やや速く			アタセト	その音を強調して			
	アレグロモダート	ほどよく速く			アタセト	その音を強調して			
	マーチテンポ	行進曲の速さで			アタセト	その音を強調して			
	速度記号	1分間に四分音符を60回打つ速さで			アタセト	その音を強調して			

音楽記号, 音楽用語一覧表 (図8)

6. 本書で使用する音楽記号, 音楽用語一覧

基礎的な音楽記号, 音楽用語の他に、読譜の学習に欠かせないリズムソルフェージュのためのリズム読み方の定義を一覧表にしている(図8)。

VI. 授業の進め方

授業の進め方(指導法)については各回統一することで読譜手順の定着化を図る(表9)。

グループレッスン指導内容(表9)

No.	内容	時間
1	ストレッチ、発声練習、テーマ曲の合唱	10min
2	読譜スキルアップ楽典ワークシート	10min
3	読譜スキルアップ法指導(予習・復習課題) 読譜力定着のため毎時間、以下手順で実施	20min
a.	リズム唱 リズムの読み方の定義に従ってリズム視唱	
b.	リズム唱 + リズム打ち	
c.	階名唱(固定ド唱法)	
d.	旋律の指使いの確認	
e.	階名唱+正しい指使いで旋律をピアノで演奏	
f.	歌詞唱+正しい指使いで旋律をピアノで演奏	

	g. コード（和音）の指使い、ポジション確認 h. コード奏 コード伴奏は拍子に合わせて1拍につき1回 i. コード奏+階名唱 j. コード奏+歌詞唱 k. 両手で弾き歌い演奏	
4	個人練習時間（指使い等の巡視、個別指導）	10min
5	全員で弾き歌い 右手旋律 → 歌 → 左手和音 → 歌 → 両手 → 歌	10min
6	課題曲による模擬保育実施	15~30min
7	まとめ、次回予告	5min

VII. 教材の効果と結果

授業実践結果から見る開発教材の有効性について、器楽演習Ⅰ単位取得率100%（表7）、音楽理論科目による定期試験（表2）音符・休符98%、リズムの読み方98%、コード100%の正答率から読譜に関する理解と基礎力が習得できたことが考えられる。音楽理論と読譜スキルの理解度に関する調査結果（表1）よりリズムの読み方を理解すれば楽譜が読めることがわかった70%の結果から読譜力の習得がピアノ学習を向上させるということが考えられる。

教材の有効性については、96%（表3）がコード楽譜で演奏できると回答、また、90%（表5）が本教材を学びやすいと回答していることから、初心者でも学びやすく、読譜スキル及びピアノ弾き歌い技術習得が15回の授業を通して可能であり、保育者養成ピアノ教材として効果あることが明らかである。

共同学習を取り入れたグループレッスンを行うことにより、時間を有効活用でき模擬保育や発声練習、ソルフェージュ、歌唱表現指導など音楽基礎力の向上へと繋がった。一人ひとりをきめ細やかに指導できないデメリットは否めないが、個人レッスンの限られた時間では、指導に及ばなかった読譜スキル向上のための学習がピアノ学習を円滑にし、限られた時間の中でも数多くの課題曲に取り組むことが可能となり、コード伴奏の応用力の習得に繋がったと考えられる。

これまで個人レッスンを主とした授業を行っていた際は、楽譜が読めず、教員が演奏した動画を録画したり、Webより、YouTube動画等を頼りに練習したりする学生も多く見受けられたが、グループレッスンにより読譜スキルを習得したことで、動画等に頼る学生は見られなくなった。

読譜スキルが身に付いたことで、予習、復習を行っ

てくる学習者が以前より増えたことも単位取得率に繋がったと考えられる。

前述の授業の進め方を授業15回で統一することにより、授業回数及び課題曲を順次習得していくことで、コードネームによるコード伴奏の習得、読譜力の定着が見られ、コード譜によるコード伴奏の徹底と楽典ワークシートの学習により読譜力が向上したことがわかる。また、点数制のレパートリー・スタンプ評価シートを活用したことで、学習進捗状況が明確なため、ピアノ学習のモチベーションに繋がったことから、本教材が有効で効果的であることが明らかとなった。

本研究結果を経て、保育者養成のためのピアノ弾き歌い教材として2020年5月に出版を予定している。

引用文献及び参考文献

- 井口太（2018）『最新・幼児の音楽教育－幼児教育教員・保育士養成のための音楽的表現の指導』、朝日出版社
- 坂本暁美（2013）『協同学習を取り入れたピアノ実技指導の学習効果』、四天王寺大学紀要 第56号、pp.153-164
- 高崎展好（2018）『IPU芸術センターピアノ独習室利用状況調査報告－器楽演習履修者にみる主体的なピアノ自主学习調査－』、環太平洋大学紀要 第14号、pp.193-200
- 畠澤郎（2015）『小学校教員養成課程用 新・音楽科教育法』、朝日出版
- 平井李枝（2016）『教員養成課程学生に対するピアノ「弾き歌い」指導法の研究』、宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第2号、pp.91-98

注

- 1) M.L. (Music Laboratoryの略)。一般に、指導者用電子ピアノ1台と学生用電子ピアノ数十台があり、ヘッドフォンマイクを通して教員と学生、学生同士、教員とグループが、音楽を聴き合ったり会話をしたりすることが可能なシステム。
- 2) 高崎展好（2017）『器楽演習Ⅰ・Ⅱ わかりやすい！学びやすい！コードでかんたん！保育のうた』第1刷、環太平洋大学学内特別研究
- 3) 全音楽譜出版社『標準バイエルピアノ教則本・併用曲付』
- 4) チャイルド本社『こどものうた100』

被験者となる学生より研究に関わるデータ使用, 画像
等の掲載許諾済